

## オバマもすなる「シェン語の挨拶」考 — 語感と語源への誘い

小馬 徹

2015年7月24日(金)午後、バラック・オバマ米大統領の専用機 Air Force Oneが、ケニアの首都ナイロビのジョモ・ケニヤッタ国際空港に降り立った。この訪問でケニア人があっと驚き、痛く傷付きもしたのは、その警備からケニア側が完全にシャット・アウトされた事実だった。この日の夕方、オバマは長旅の疲れも見せず、晩餐会を開いてケニア人親族たちをもてなし、歓談した。

オバマの実父(故バラック・オバマ・シニア)は、南西ケニアのルオ人で、米国留学中にオバマの母親となる白人女性人類学者と知り合って結婚した。オバマが大統領就任後即座に訪れる期待が高かったので、ケニアには任期終盤になっての訪問に些かの失望感もあったのだが、ともかく、彼はケニアを訪れた最初の現役米大統領となった。一方、彼の届け出られた出生地ハワイは偽りで、実際にはルオ人の土地だったらしいとされ、米国のソーシャル・メディア上では「最初のケニア人米大統領」という苦いコメントも飛び交った。

熱烈歓迎の最中に澀むこうした微妙な空気を、翌25日(土)、同地で開催された Global Entrepreneurship Summitの開会式典での見事な挨拶戦略が、一気に吹き飛ばした。オバマは、ほぼ開口一番、“Jambo?... Niaje wasee?...Hawayuni?”と矢継ぎ早に現地語の挨拶を繰り出した。会衆は一瞬棒を呑み込んだかのごとく沈黙したが、驚きの風情はすぐに氷解して熱狂に変わり、拍手と歓声

がホールを響もして暫し鳴り止まなかった。

“Jambo?”はスワヒリ語(東アフリカ地域のリンガ・フランカ、話者1億人超)の口語的挨拶の常套句で、世界的に知られてもいる。語感は「元氣?」に近い。続く“Niaje?”は、ケニアの若者言語シェン語の最も一般的な挨拶言葉だ。他には、挨拶として“Sasa?”(今は[どう]?)や“Vipi?”(どう?)も多用されるが、“Hawayuni?”は全く耳慣れない。英語の“How are you?”に海岸スワヒリ語(海岸部の母語の一つ)の複数人称接尾辞“-ni”を付けたシェン語風表現だろうか。人々の一瞬の戸惑いの原因の一つがここにあったと思う。

無論、熱狂の謂われは“Niaje wasee?”の方だった。“wasee”(sg. msee)の語源はスワヒリ語で「大人、老人」を意味する“wazee”(sg. mzee)なのだが、語意は「てめえら、あんたら」へと遷移し、“Niaje wasee?”の語感英口語の“Hi guys!”に通じる。

シェン語は、1990年代初めの電波自由化で蔭生したFM放送局が重用して急速に普及した。2000年代の旺盛な反エイズ・キャンペーンに汎用されると、そのクールさがうけてさらに若者の心を驚掴みにする。政治家も若者の歓心を買おうと選挙時にシェン語を援用し、今度のケニア訪問でオバマもそれに倣った。シェン語普及団体は、ついに世界の認知を勝ち得たと色めきたったものだ。

なお、植民地期に都市労働者として政策的に動員されて首都ナイロビ郊外に住まわされた(西ナ

イル諸語系のルオ人とバントゥ諸語系のルヒア人を中核とする)南西ケニアの諸民族が、1960年代、相互の意思疎通と生き残りのために、ピジン的な内陸スワヒリ語に英語とルオ語やルヒヤ語を初めとする種々の民族語の語彙を接ぎ木したことで生まれた新混成言語が、やがてシェン語となった。

さて、寡聞にして“*Niaje?*”の語源が論じられたのを全く知らない。そこで、本稿は大胆な仮説を立て、叩き台として供したい。まず、タンザニアが近代言語へと長年整備を推し進めてきた正統スワヒリ語(*Kiswahili sanifu*)に“*Niache.*”の表現があり、また“*Niache nimbé*”(“Let me sing.”または“Leave me to sing.”の意)という題の流行歌が思い出される。タンザニア音楽は、東アフリカ海岸部(*swahili*)の伝統音楽ターラブの流れを引いていて、隣接する東アフリカ諸国でも親しまれる美しい旋律の歌曲を幾つも生み出してきた。

一方現代ケニアは、(南ナイル語を話す)カレンジン諸民族の歌手たちが席卷している。カレンジン諸語は有声音と無声音(例えば /j/ と /ch/)を区別せず、両者は筆記上ほぼ無原則に混用され

る。だから、彼らが“*Niache nimbé*”を奏する時、それは同時に“*Niaje nimbé*”としても音声的に現象する。他方、首都ナイロビとその隣接地に住むケニア最大のギクユ民族等のバントゥ語系諸民族にはその混用は滑稽で、(政治的には強力なライバルだが、前近代的な牛牧に執着して)僻遠の地に住むカレンジン諸民族の田舎臭さを揶揄する恰好の材料となるのだ。若者言葉たるシェン語表現の特質は、起源をなす隠語的性格をなおも強く温存し、田舎を片端からからかう気風が今も盛んなこと。ただし、その田舎臭さを敢えて引き受け、前面に掲げて権威を嘲弄しようとする両義的な傾きも合わせ持っていて、簡単に気を許せない。

こうして“*Niaje wasee?*”が成立したとすれば、「ほっといてくんな、てめっち」と直訳できるこの挨拶言葉の、正にシェン語的な通俗性と反語的気骨がよく腑に落ちることになろう。また、「ご機嫌いかが?」に当たるルオ語の普通の挨拶表現“*Ere wache?*”が幾分“*Niaje?*”(“*Niache.*”)に近い発音であることも、或いは後者の表現を包摂し易くした一つの要因となっているのかも知れない。

\*\*\*\*\*